

海外インターンシップ報告書

氏名	古里 孝志 (フルサト コウシ)
所属	鹿児島大学 農学部 農林環境科学科 1年
渡航先	スリランカ

1. 参加目的

来年からのブラジル留学を前に海外において一人で生活できる素養を身につけたかった。特に外国人との英語を用いたコミュニケーションや自己管理能力を学びたいと考えていた。

また、渡航先にスリランカを選択した理由としては、世界的に周知されるほどのブランド力を誇る「セイロンティー」の生産から加工、販売に至るまでを現地で実際に調査し、「ブランド化」という事象の秘訣を学習したかったためだ。



2. 大変だったこと・つらかったこと

振り返ってみて最も大変だったなと感じたのは、課題を達成するためのプロセスである計画を立て、実際に行動を起こすという流れを異国の地でモチベーションを保ちながら勢力的に行い続けるということだ。日本・鹿児島とは異なる文化、気候、コミュニケーションを体感しながら、課題を達成するために動き続けるということは、体

力とモチベーションという二つの面において想像していた以上に大変であった。

3. 楽しかったこと

鹿児島県の緑茶を外国人にPR、販売を行う過程で、いかに文化的に異なる相手に商品への興味を持ってもらうかということを考え続けたのだが、その検討が工夫という形になり、それで実際に結果が出た時が一番嬉しく、また今振り返るとその過程が最も楽しかったと感じている。



4. 達成できたこと

私の参加目的の一つである「セイロンティー」のブランド化の秘訣について学習するというに関しては、現地のティーファクトリーに赴き、生産者に話を伺う過程で、概ね達成できたのではないだろうか。



5. 渡航前と渡航後の自分自身の変化

以前までは、努力さえすればいいと考え闇雲に行動していた。しかし、今回のインターンを通して、何のために何を達成したいのか、達成するための具体的な方法はどのようなものかなど、目的意識を持って計画的に行動する必要性をひしひしと感じ、常にそれらを意識して行動を起こすようになった。また、その結果、時間的・メンタル的に余裕が生まれ、QOLが高まったように感じる。

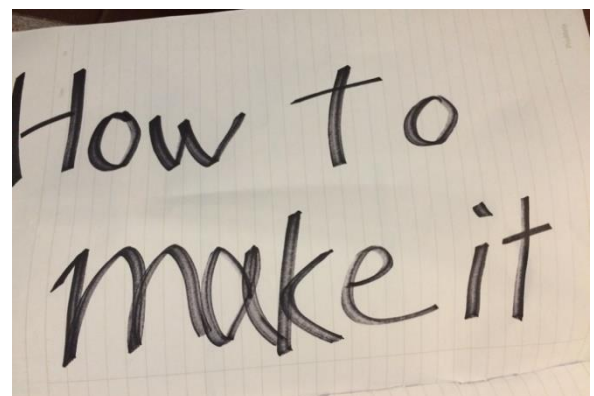
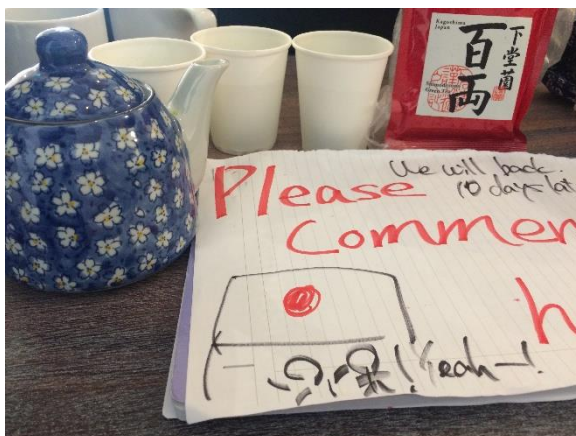
6. 現地での商品の反応

日本というブランドを意識した和風のパッケージはデザインとして現地の方に非常に好評であった。特に「漢字」は、一つのアートとして現地で見られており反応が良かった。この経験から、パッケージも商品を構成する重要な要素であることを再確認し、パッケージをデザインするという点に関して、自分自身の中で関心が芽生えた。

7. 商品が現地で広まるためには、どうする必要があると思いますか。

6.に挙げたように和風のパッケージは非常に好評であったため、外国人に向けた、よりわかりやすい形の和風のパッケージを採用すべきだと感じた。具体的な案として、桜をモチーフにした桃色のパッケージ、漢字を前面に押し出したものなどを提案する。

もう一つの案としては、お茶の淹れ方の説明書を添付した上で急須と湯のみをお茶とセットにして売り出すのはどうだろうか。これにより、本来の飲み方を体験することができ、商品そのものだけでなく、体験を消費者に提供できる。



8. 海外インターンシップを通して、あなたにとって「働くとは？」何ですか。

働くとは、自分自身が提供できる価値を需要に合わせて変化させ、提供し、その対価としてお金をもらうものだという風にした。この考えに至ったのは現地で鹿児島茶をPR・販売する過程で、相手の需要に合わせて商品のPR法を変化させたという経験が関係しているだろう。例えば、日本に興味関心を持っている方には和風のパッケージを前面に押し出しPRした。また、健康志向の方には緑茶の持つ効能について深く伝えた。以上のように、相手のニーズに合わせて自らの価値を伝え、提供するという事は、どのようなビジネスにおいても基本となっているように思う。また、働くということにもそれは当てはまるのではないだろうか。

9. 現地での活動を振り返って、感じたこと

このインターン中、私はゲストハウスに宿泊を続けたため、スリランカの方だけではなく世界各国の方とコミュニケーションを図る機会に恵まれた。そしてゲストハウスに宿泊する方々は皆、バックパッカー、ノマドワーカーなど本当に多様な生き方をしていたのが印象に残っている。渡航を終えた後、大学卒業後は就職しなければならないという日本の常識に対して疑問を持つようになった。世界を見渡せば非常に多様な生き方をしている方々があり、それと比べると日本の常識という枠にはまってキャリアを形成していくのは勿体無いと感じるようになった。では、どのようなキャリアを築きたいのか、明確な答えは出ていないが、今後も様々な活動を行いながら、それを自分自身に問いかけ続け、後悔のないキャリア選択をしていきたい。

